

VECTOR 1

ARCHITECTURE ENVIRONMENT LIFE

Dialogue 1
Dialogue 2

Dialogue 3

Project & Essay
by SHUZO OKABE

Little Break

時間を超える建築の力を信じて
自然体で“真ん中”を変えられる時代に

想い続けること、そして宇宙

SEINAN+
House in Kyonan
United Nations University
TSUYUKUSA CLINIC
House in Eifukucho
YCAM

House in Kugenuma
Semitransparent Design Office

坂本一成
清水義次
左京泰明
村上祐資

「建築家として未来に向けて」

建築と取り巻く環境が、人間の多様な活動の起点になること。それは、“建築”にとって重要な役割だと考えている。多様な活動とは日々の生活と言い換えられる。建築と環境、そして生活。それらを対象として、変化する時代を読み解き、なぜ、なにを、どうつくるのか、常に考え続けていたい。状況を丁寧に整理して、合理性と新しさを兼ね備えた豊かさを追求する。“建築”を介した社会における可能性の探求。それは、本質的な美しさと向き合うことにつながるはずだ。変化の激しい今だからこそ、変わらない“建築”と、“建築”の新しい可能性を求めながら、未来を描くことについて考えたい。

時間を超える 建築の力を信じて

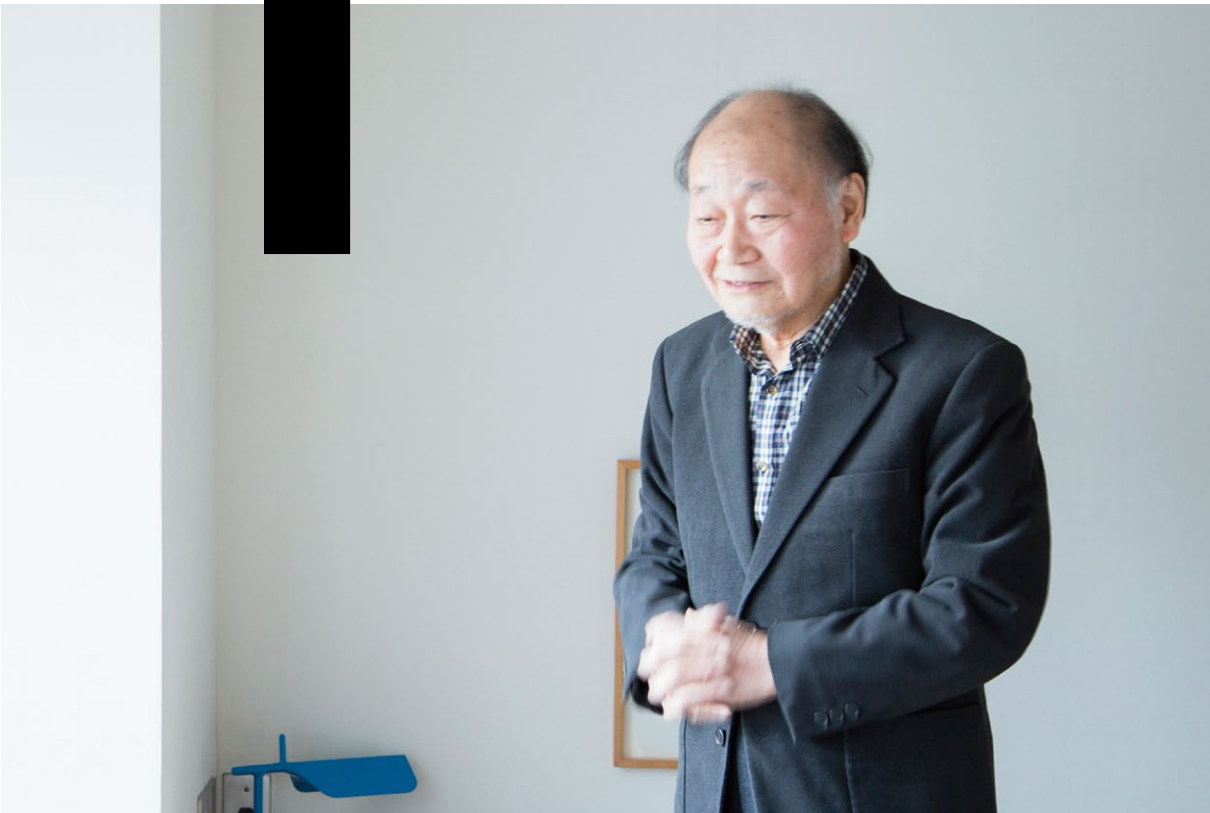
1

坂本一成

KAZUNARI SAKAMOTO

建築家

1943年東京都生まれ。東京工業大学で篠原一男に学ぶ。長年にわたり大学で教鞭を執りながら、研究室を基盤に設計活動を展開。住宅を中心に時流に流されない確固たる仕事をなし、国内外で高い評価を得る。現在は建築設計事務所アトリエ・アンド・アイを主宰、東京工業大学名誉教授。1990年に「House F」で日本建築学会賞（作品）、1992年に「コモンシティ星田」で村野藤吾賞、2013年に「建築に内在する言葉」（TOTO出版）で日本建築学会著作賞をそれぞれ受賞。



半世紀にわたる建築家としての活動と、約40年にわたる大学での教鞭を通じて、建築の可能性を世に提示し続けている、坂本一成さん。そんな坂本さんの40年以上前、1976年竣工の「代田の町家（P.30 左上写真・右上図）」に友人が住み継ぐという話を聞いて以来、じっくり見学できる機会をうかがっていました。ますます激しくなる社会の変化と、広がる建築家の可能性、そして、いつまでも変わらない建築の本質。社会と建築の関係に真摯に向き合い、新しい視点を提示し続ける坂本さんと、現在進行形の「代田の町家」を住み継いだ友人を囲んで、変わらない建築の役割、そしてこれからの建築について、お話をさせていただきました。

生活のための躯体

S：今日は貴重なお時間をありがとうございます。ガーダーさん（代田の町家の住人）を友人から紹介されて、家を建てるための土地を探していると聞いていたので、この代田の町家に住むことになったと聞いて、それは素晴らしい選択だと思っていました。

K：そうですね。仕事を取っちゃったってことですね（笑）。

S：いえいえ、とんでもない。僕が住みたいくらい好きな家なので、それ以上の選択はないと思ったのが正直な感想で、これを機会にいつかゆっくり拝見したいと思っていました。今日はそれが坂本さんに解説をいただきながら実現できて、とても嬉しく思います。写真では何度も見ていたので不思議と初めて来たような気がしません。

K：構成としては非常に単純ですからね。どういうふう to 受け

取るかは人によって随分違います。完成した当時は、空間の無い、ただの部屋がつながってるだけじゃないかと、私の所属していた篠原研究室の後輩たちからも批判されました。当時、見に来た建築家たちも批判的な人が多く、「よくわからない」と言われました。つまり、空間がないというコメントをもらって、かなりがっかりしてしまいました。自分としては、それなりに新しい空間だと思ってたわけですから。でも、もう亡くなられた、評論家の多木浩二さんが僕が考えてたようなことをほとんど理解してくれて、的確に評価してくれました（笑）。

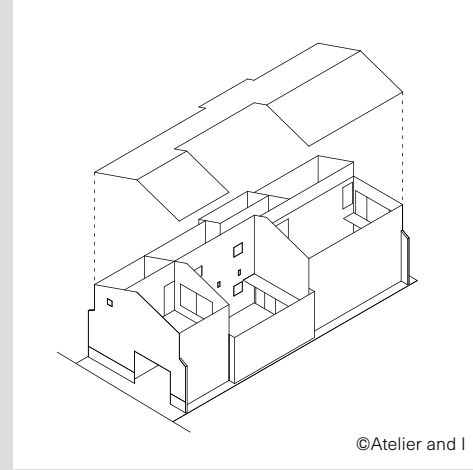
S：当時の文章はいろんな形で読ませてもらってます。

K：そうですね。そうすると大体感じはわかると思いますけど、部屋の関係を、構成として説明するとしたら、それまで僕がやってたのは、包含関係といって大きな空間の中に小さな空間が入り込むという形式でした。そうすると、まとまりの関係が視覚的にすぐ現れるので、そこにある種の空間性みたいなものを感じられたんだと思います。でも、この家では切れてしまっているので、真ん中にいても全部の空間がわかるわけじゃないですね。ただ、一度経験すると、どこにいても全体の中のどこにいるかということが把握されやすい空間だと思います。空間を常に背負っているという、そういう空間の在り方で、それこそ西沢立衛さんの空間と割合近い部分がある、というふうに言われたこともありました。

S：それ、ちょっとわかります。

K：僕はここが寝室で、ここがリビングで、というようなことは言っていない。ここが中心の部屋で、あと幾つかの部屋がありますと表現しています。もちろん、その時の家族については想定はしていましたが、同時に、どうやってそれらを抽象化するかについて考えています。だからガーダーさんたちがお住まいになって、その辺は違和感無く、問題ないんじゃないかなと思います。

S：僕の感覚では、住宅は施主のための特殊解、という意識



があります。もちろんフレキシブルに、普遍性を持ってほしいとは思っていますが、誰かのためにつくった住宅を他の人が住んで成立するっていうのは本当に、興味深い。

K:なるほど。そういう意味では、抽象化しようとした、という話とつながりますね。部屋という単位はあるんですが、すべてが見えるわけではない。でも、一度理解したら、どこにいても全体をイメージできる。そういう部分がおそらく、この建物の一番の特徴になるんじゃないでしょうか。この住宅から僕は、社会と言うとオーバーに聞こえますが、そこに連続させたいと思うようになりました。

S:先ほど住宅内を見学させてもらった時に思ったのですが、改めて、閉じ方と開き方のバランスが絶妙だと思いました。そして実際の面積以上に空間を感じます。この感覚はきっと、絶妙な寸法の操作によるもので、その効果が全体に及んでいると思いました。ガーダーさん一家が引っ越された後に、「住んでみてどうですか?」と聞いたところ、すべての寸法がピタッとはまっている感じがする。というコメントが印象に残っています。保存するという意識ではなく、そのままがかっよくて、住みやすい、ということが驚きです。

K:それはガーダーさん達だからかもしれないですね。これはお二人にも言ったことはなかったのですが、この家を設計している時、最初にクライアントが自分で間取りを書いてきたんです。まあ、その当時の普通の人が考えるようなプランでした。その時に、気持ちは理解できるけれど、任せてくれという話をしたことがありました。そのあと今のプランを出したんですが、それがほとんどそのまま建ちました。あるところで、設計者に任せよう、ということになったんだと思います。その後は、すべて任せていただきました。そうでなければ当時、床を石にするということも叶わなかったかもしれません。そういう意味でもある種、特殊性もかなり高い家だと思います。その上で、先ほど抽象性という表現をしましたが、なるべく一般性のある場所をつくっていきたいという思いに、うまく重なっていただけの方に巡り会えた、こういうことじゃないかと思います。

S:ガーダーさん夫妻がここに住むのはある種の必然性さえ感じますね。雑誌で住み始めた様子を見てこれは良いな、と思いました。それだけではなく、さっき部屋を案内いただいた際に、日当たりと風の通りが良いので、エアコンも暖房もほとんど使わないという話がありました。意匠性と機能性を備えた抽象的な空間、というのは簡単ですが、本当に素晴

らしいと思います。過去に、「躯体が出来たときに、この状態のままがよいと思うことがある」という坂本さんのコメントがあったと思いますが、まさにそれですよ。その感覚、すごく分かる部分があります。根幹がきちんとしていれば、その先はいろんな可能性があるってということだと解釈してるんですけど、まさに手本のような感じですね。

K:そんなこと言っていましたね。ガーダーさんたちが今、バランスの良い状態で住んでいただいているのを見て、幸せな家だと思います。

建築が弱まっている

K:岡部さんは非常に広範囲な仕事と関わられていて、非常に素敵だなと思います。さっき、社会に対して云々という話がありましたが、僕らの時代の、特に日本の中では、なかなか社会との接点は持ちにくかった。今、建築も柔軟になってきて、社会にも受け入れられるようになって、接点が多く出来始めてきたということかなと理解しました。これは、岡部さんだけではなく、割合と多くの若い建築家たちが、いろんな形での社会的な接点を持ち始めていると感じます。ある意味ではとてもいい時代になったと思います。それは、岡部さん始め、すごく努力をされている結果だと思います。ただ、ちょっと気になるのは、これまでの話を“物”と“事”とに分けるとするなら、“物”の方、建築自体についてです。あまりにも社会と接点を持たせたいという思いが高まり、意識が“事”のほうに集中してしまい、建築自体の在り方がちょっと弱まっているかなという、印象があります。

S:まさにそう思います。僕自身が事務所をスタートした時、時代の変化に可能性を大きく感じて、建築の拡張を目指して、変わるんだっていうことを一生懸命やってきたつもりなんですけど。やればやるほど建築は建築でやるべきことがあって、そこをもっとやらないといけない、と思うようになりました。今の時代、本当にいろんなことが可能になってきているので、

その新しい広がり追求と、その中でも変わらないものの追求、それを同時に進める必要があると思います。この、「代田の町家」が幸せな形で継がれているのは、まさに、時代が変わっても建築として強度を持ち続けたからだだと思います。今日ここで話したいと思ったのは、それを感じたかったということが大きいと思います。

K:建築は、当たり前ですが、特定のクライアントが前提にあります。特に住宅は最も個人的なものでもありますから、そのクライアントの要望、思いみたいなのは実現しなければいけない。ただ、それを意識し過ぎると、それに終始してしまう可能性がある。建築への思いみたいなのはそれと同時に、もしくはそれを超えて、普遍性というべきですかね、ある種の確かな物の在り方みたいなものを、やっぱり実現したいと考えます。そんな思いが多分、私自身はかなり強かったような気がします。ガーダーさんがここに住まれて違和感を感じないとするれば、そういう抽象化が成立するということになると思います。僕がこれまで設計した住宅では、別棟を建てるということはありませんが、本体の大きな改築というのは全くありません。

S:先ほどからおっしゃっていた、曖昧さ、抽象性、そういうところが余白につながっているということなんでしょうね。僕らが住宅設計をする時、どうしても特殊解を求める傾向がある。あるいは、本当に特徴のない一般性を良しとする傾向もあります。前者を追求して、本質ではない議論になっていくことも、後者に甘えて建築の話ではなくなる、ということも危惧しています。そういう意味でここで言う、抽象性については、改めて考えてみたいと思います。

K:一般解と言っても、ハウスメーカーとか、ディベロッパーが運営して企画したものは違いますがね。ある種の、その“物”としての強さをどうにか位置付けたい、ということなんですよ。

S:強さ、そうですね。今日は随所に、一般解を追求した結果、

独自のものになる、という感覚を体験できて、本当にそうだなと思いました。

我々は揺さぶられている

S：先ほど、いろんなことが可能になるに従って、同時に建築が弱くなっている、という話がありました。僕もそう感じていて、その部分が、今日最もお話ししたいところでもあります。建築にできることも、変わっていくところと変わらないところがあると思います。坂本さんがおっしゃっている、建築の「零度の座標」のお話は、本当にそうだなと思っています。その上で、時代の変化に合わせて、「零度の座標」自体の設定がどう変わっていくか、同時に、変わらないものは何か、今の時代をどう捉えていらっしゃるのか、合わせて伺いたいと思います。

K：社会の在り方、あるいは構造も含めて、僕が生きてきた時代の中でも、今はものすごく複雑になってきている。その中で、右往左往するような部分があります。さっきの、建築の社会性の話なんか、例えば僕が勉強し始めた前の日本の状況では、戦後すぐ住宅しか建築が出来ない時代であって、その時に、建築家のとてもいい住宅がたくさん出来てるんですよね。

S：本当にそう思います。

K：そのあと、住宅なんか建築じゃないと言われた時代が、大体1960年代ぐらいからありました。社会的に公共建築がたくさん出来た時代ですよ。その頃、僕は大学に入ったのですが、篠原研究室では住宅しかやらないわけです。これは幾分、肩身が狭い感じがして、僕も将来、都市をやりたいなと思ったくらいでした。実際には、そういう環境にいても篠原一男さんは非常に魅力的な建築家でしたから、どこかで、これでいいんだというふうに思いながらも、肩身の狭い部分がずっとありました。まさにこの「代田の町家」を設計したのがそれに続く頃で、先ほどの話に戻りますが、「住宅なんかやって社会性がないということで、僕は批判を受けてます」と、

多木さんにお話ししたことがありました。

S：興味深いです。

K：多木さんからは「坂本、少なくともこの建物を見る限り、社会性の強い建築と僕は考えるよ」と、言われたんです。その意味が最初、わからなかったのですがよく聞くと、社会性というのは例えば、プログラムに限ることだけでなく材料の使い方など何でもいいんですけど、大理石を床に使ったとしても、ある種高級な素材を見せるために使ってるとは思えない、社会的な意味の操作が強くなるというわけです。

S：装飾ではないということですね。

K：そう。だから、例えば、この板にペイントを塗るということにしても、木材の表面のきめの良さを見せるためとは違う考え方がそこにある。それ自体が、社会がもたらしている、住宅に対するイメージをずらしている。そうやって、新しい意味で建築のメニューに位置付けようとしているということ自体、社会性なんだということを言われたことで、これでいいのだと思い始めました。つまり何が言いたいかということ、状況によって、当たり前ですけども我々は揺さぶられている。さっきの社会性という話ですが、僕もある時代以降、社会性がなければ建築が持っている根拠が取れない、と思い続けています。しかし、その上で今の時代は、社会性ということに対して、あんまりに行き過ぎているんじゃないかと思うのです。さっきの質問に戻りますが、最近の状況をどう考えるかという質問に関しては、いろんな状況の中で行き過ぎるということは、とても危ないなということだと思います。

S：確かに、社会性と一言で言っても、いろいろある。わかった気がしてそう言ってしまうかもしれません。僕自身、設計を始めてから今まで、領域を広げたいと思ってやるわけではなくて、良い建築をつくらうと思うと広げざるを得ない、という状況があったんだと認識しています。それによって



建築一つ一つに、最終的にはコンテンツにまで説得力を持ってくるような、そういうことができればいいなというのが一番根本的なモチベーションです。

K：ですから、今の状況に対して悪くはないけれども、もしかすると行き過ぎているのではないかということ、より相対化するような状況の中に、われわれは位置付けなければならないということです。それは、建築に対してニュートラルなものであってほしいという思いに、連続しているんじゃないかと思うのです。

空間の中にある詩的なもの

S：考えるべき示唆に富んでいます。先ほどの、「行き過ぎて広がり過ぎている状況」の中で、これだけは絶対建築に残るだろう、というところはどのような部分になると考えていますか？

K：空間にある詩的な部分——ポエティックな部分。やっぱり、これをつくり出せないだろうかということを探りたいと思います。

社会の状況や時代によって、ビルディングタイプは変わっていくわけですし、どんなビルディングタイプが生まれようと、なくなると、結局、従属してしまうようなこと。すなわち、商業主義と言っても良いと思いますが、われわれは生きてる限りそういうことに関わらざるを得ないわけですから、商業主義を否定なんかできないわけですからね。それはそれでいいんだと思うんです。そこに何が込められるかが重要で。この住宅もそうですけど、展覧会などで古い住宅の写真を出したりしてるんですけど、自分でも40年も前のを出してずうずうしいなと思いつつ、もちろんずれてる部分はいろいろあると思いますが、どう

にか耐えられてるなと思うんです。この、ちょっとずうずうしい重心みたいなものがあるから、建築をやってられる。

S：今の世の中は、本当に変化が激しくて、これからもっと激しくなると思います。建築の産業自体も節目を迎えてると言いつつ、何となく、みんな直視できない状況だと思うんです。当然、商業のうちの一つですから、商業主義なんて言葉自体がおかしい。そうした中で、一番中心にある部分、その強度があるということは、すごく重要だと思うのですが、詩的——ポエティック、という答えが返ってくるとは思いませんでした。

K：そうですね。でも、この建物を魅力的だと思ってくださる人は、きっとその部分に対してじゃないでしょうか。

S：それは、本当にそうだと思います。でも、建築の業界で、坂本さんの話をできる相手っていうのは結構、難しく話す人が多いです。

K：そうですね（笑）。

S:それは決して悪い意味じゃないんですが。もちろん批評は重要だと思っているので、僕自身も文脈を意識して話すこともあります。ただ、ガーダーさんも含めて、良いなと思ったり、住みたい、ということには関係ないですよ。普通に「これ、いいよね」という感覚が重要だと思っていて、それは単純にただポエティック、もしくは芸術性があるという話ではなくて、強度がある上に、こだわりを積み重ねたり、ちょっとしたズレを意識的につくったりすることが重要ということ、今日、改めて感じました。僕自身も社会的なことを考えて広がっていった先に、感覚的な良さとか、芸術性が重要だと思っていて、まさにそこを見直していたところなので、嬉しい答えでした。

K:例えば、今話している部屋の家具もそうですし、ここから見えるソファもそうですが、関係として低い水平なレベルで、高さが揃っています。そんなことどっちでも本当はいいことなんじゃないかな……。

S:ラインが通ってるんですね。

K:通ってるでしょ。それによって、この場所の、ある種の安定性みたいなものもつくっていると同時に、詩的な意味をそれをつくってるんじゃないかと僕は思うんです。そういうコントロールによって空間をつくるのが、建築をつくっている。僕はそれが楽しいから今までやってきているし、これからも多分、続けていけるかなという感じがあります。

S:坂本さんは、さっきも「そんなことはどっちでも本当はいいことなんだけど……」とおっしゃってましたし、過去にも「ディテールは重要だけれども、語る対象ではない」ということを繰り返しておっしゃっていますが、僕もいつもそう思っています。もちろん身内、もしくは同業者同士でディテールの話をすることは嫌いではないですが、それよりも結果としてどんな感覚をそこにいる人に与えられるか、それが大事だと思っています。

K:岡部さんがおっしゃったように、時間に耐えなきゃならな

いってところが、建築は他のジャンルと違うと思います。つくることにも時間がかかるし、もちろんそれを社会的に成立させる中で、時間に耐えられるかどうかということが、一番大きいと思います。

時代の変化と批評性について

S:少し話は変わるのですが、建築における批評についてお話しできればと思います。作品を批評することの重要性はもちろん理解しているつもりですが、今は専門誌を見る人が少なくなってしまって、その有効性がどんどん弱くなってしまっている、という話があります。自分の感覚の中でも、意識して読むようにしていますが、同業者の、その中でも一部のコミュニティにおける身内感が強くなる一方に感じます。先ほどの職能の広がりの話や、インターネットの登場によって媒体自体が分散しているということもあると思いますが、その辺りに関してはどう感じていらっしゃいますか？

K:確かに世界的に建築ジャーナリズムがどんどん消えていくという状況が一方にあるわけですから、「新建築」は良くもっている、というぐらいの感じかもしれません。先ほども触れましたが、僕の先生は極端な建築家で、完全に「新建築」を相手に建物つくっていたとも言えます。あんなに発表する場所に対して思い入れが強かった建築家は、いないんじゃないかなと思うぐらいです。

S:本当にそうですね。そしてその流れは受け継がれているようにも思います。良くも悪くも。

K:僕はそれに対して、もちろん最初は素晴らしいと思いましたけど、だんだん批判的になっていきました。建築っていうのは、もうちょっと実態の意味のほうが大きいのではないかと。そう考えていくと、ジャーナリズムの問題ではなくて、自分が納得できるリアリティが持てる空間が実現できるかどうか、ということが最大の目標なんだと思います。ですから、僕自身、

かつてほどジャーナリズムを信頼してない。例えば住宅みたい、ジャーナリズムを通さないと、表現が難しいというものがあることは事実なんですけども。ほとんどの場合、それは一つの記録にしか過ぎない。今は、そういう位置付けしかないんじゃないかと思います。先ほどから社会性とは言いながらも、自分自身が何ができるか、ということだけの問題になってくる。これは若い人に言うべきことじゃない気もするんですけど。

S:なるほど。そうなってくると、批評というのは、自分自身で歴史や文脈を参照しながら構築していくということになるんですね。

K:もちろんそうです。批評はおっしゃるように、かつてはジャーナリズムを通して成り立っていたけれど、それが成り立たなくなりました。でも、批評性がないと自分自身が納得できない。批評性を伴わないようなものは、それこそ、ポエティックな問題も成り立たないと思います。

S:本当にそう思います。メディアを事業として考えた時、これだけの変化に追随しつつ、業界全体を網羅した批評性を保つことは期待すべきではないかもしれませんね。これだけ新しいことが起きているので、もし自分でその枠に当てはまらないと思うのであれば、自分でそれを批評できるだけの理論を構築するべきだと改めて思いました。

そして、その先の建築へ

S:さっきふと思ったのですが、坂本さんの年齢まで考えると、僕はあと40年あります。

K:うらやましい限りですね。あんまり生きたいって感じはないんだけど、まだまだやりたいなという感じはあります。

S:そう思えるように頑張り続けなければと思います。先ほど、この家が40年前の作品という話がありましたから、ちょうど

今の僕くらいの時の作品ということになります。ガーダーさん夫婦は、僕の知る限り、極めてシビアに、良いものを見極めるタイプだと思っています。そんな現代的な感覚を持つ二人に、40年経った今良いと言わせることは、繰り返しになりますが、本当にすごいことだと思います。同時に、これからの進む僕たちにとって、とても励みになります。先ほどの話にもつながりますが、建築への関わり方が多様になってきた今だからできる建築を、つくっていきたくと改めて強く思います。

K:まさにこれからですね。

S:見ていただけるような建築をつくらなきゃと思います。ぜひ、ご案内させてください。

2017.12.17 @ Machiya in Daita

